

に層位的な発掘調査が行われた宮城県大木囲貝塚の出土資料をもとに、〈陸前〉地方における前・中期の土器型式として山内清男によって提唱され、その際、中期の土器型式として大木7～10式土器が設定された。その後、1936・1937年にa・b式の細別が同氏によって明確に示されている〔丹羽1991〕。近年では、資料の増加にともない、調査報告や論文などで、より整理された細分案が提示されている。大木9～10式が層位的に出土した宮城県大梁川遺跡〔相原ほか1988〕では、それぞれの型式を前半と後半の2段階に分けており、それらは良好な資料として注目されている。本遺跡が所在する阿賀北地域では、下クボ遺跡で大木9式を古・新の2段階、大木10式を古・中・新の3段階に分け、アチャ平遺跡では大梁川遺跡の事例とも照合させながら、下クボ遺跡の大木10式中・新段階において若干の修正が加えられている。本項では、これら下クボ・アチャ平両遺跡の細分案に準じ、先学も考慮しながら比定を試みる。

24（以下、文中の番号は報告番号を指す）は口縁部周辺のみが残存しており、現状では二重楕円形区画の上半部のみが確認できる程度である。そこに続くモチーフは、「U」字状か「C」字状の区画文が考えられようか。そうすると、上半部の二重楕円形区画は、「U」字状か「C」字状のモチーフの先端を、渦巻状に巻き込んだ部分であると考えられる。これは、大木9式新段階に比定されている下クボ遺跡A類に相当する。大木9式新段階はこのようなモチーフのほか、「J」字状文、「〇」字状文、楕円文、人面状文や、「部分的に隆帯を貼り付けて浮き彫り状にしたりする」〔菅原1999〕手法などを用いて、縦方向の文様を展開させる。本遺跡では8・9・14・25・26がこれに相当すると思われ、特に25・26は24に類似した文様構成を有すると考える。10は太い2本の沈線で縦長に区画された中に縄文が施文されているのが確認できる程度であるが、よく観察すると沈線の下端がすばまっていく様子が確認でき、「〇」か「U」字状文、あるいはこの両者を交互に配置するような文様構成が推測できる。これは大木10式古段階に比定されている下クボ遺跡B1類の「胴上部から下部を貫いて文様の描かれるもの」に相当する¹⁾。本遺跡では10以外、この類型に相当するものはないと思われる。このほか、大木9～10式と考えた土器には、1～6・12・13や27～30がある（粗製の大木式は含んでいない）が、いずれもさらなる細分を行えるほどの情報は持ち合わせておらず、これらは大木9～10式という大枠にとどめることとする。

以上、本遺跡には大木9式新段階と大木10式古段階に比定できであろう土器が存在することが分かった。観察した限りでは、大木9式古段階にみられる隆帯による渦巻文や、大木10式中・新段階などにみられる隆線や無文帯の切り合いによる施文、撚糸文といったものは見受けられないようである。このことから、本遺跡における大木9～10式の土器は、9式新～10式古段階に限定されるものとする。

3) 円形刺突文を有する土器について

10C24・11C17で出土した円形刺突文を有する土器（39）は、文様モチーフを円形連続刺突文のみで描くこと、胴部の膨らみ方が小さいながらも極端であることを大きな特徴としている（器形や文様概要は第Ⅲ章3に詳述）。筆者はこのような特徴を備えた土器の類例を知らず、調査当初から注目していたところではあったが、残念ながら現段階においても、同類の資料に行き当たることができなかった。しかしながら、部位ごとの特徴的な要素を抽出し、他型式と比較することによって、おおよその系統は把握し得るのではと考えた。ここでは39の性格を少しでも明らかにすることを目的とし、比較検討を行う。

1) 大木10式の成立には「体部の中位による沈線による波状の区画線文が描かれる」〔菅原1999〕ことや（下クボ遺跡B2類に相当）、「大木9c式（大木9式新）では開放されたままであった胴下半部の帯縄文が、これを外画していた沈線の連繫によって閉じられ、上にあげたようなモチーフを描く」〔池谷1988〕ことなどを指標とするものがある。

	部位	39	三十稲場古	39	三十稲場新	39	南三十稲場古	39	南三十稲場新	39	南三十稲場最新	39	加曽利B1(粗製)	39
		口縁	緩やかな波状	蓋受状	×	緩く大きな4単位の波状	△	円形突起波状・平	○	(山状)突起波状	○	扁平化した緩やかな波状	○	3単位波状平
器形	頸	強く括れる	橋状把手「く」の字状にくびれる	×	S字・8字状貼付文(橋状把手小型化)緩く括れる	△	緩く括れる	○	強く括れる	○	やや緩く括れる	△	直線が主	×
	胴	極端に膨らむ	球状直線など	×	球状	△	緩やかに膨らむ	△	緩やかに膨らむ	△	緩やかに膨らむ	△	直線やや膨らむ	×
	底	内→外→内と開く	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	自然に開く	×	内→外→内か自然に開く	○
	施文形態		棒状工具による不整円形連続刺突文	ヘラ状工具によるいわゆる形状刺突文	×	棒状工具による細密な爪形状刺突文・円形刺突	△	縄文地に太い沈線文 磨消縄文	×	細い集合沈線磨消・充填縄文 円形刺突文充填	×	細密な集合沈線	×	多条沈線文(櫛歯状)磨消縄文
文様構成	口縁	波状に沿った2列の刺突文 簾状垂下文	無文帯	×	無文帯	×	口唇太い刻み目 緑帯文	×	口唇刻目 簾状垂下文 口縁に沿う沈線	○	口唇部刻目 口縁に沿う沈線	×	口唇裏に沈線	△
	頸	区画文有	区画文有	△	区画文有	△	区画文有	○	区画文有	○	区画文有	○	区画文無	×
	胴	簾状垂下文	全面刺突縄文・無文	×	下半部無文化傾向 区画文・全面刺突	×	縦横に展開 U字状文など	△	簾状垂下文	○	簾状垂下文(集束傾向)	○	平行沈線文 磨消縄文	×

第10表 39と各土器型式の要素対照表

比較する土器型式については、39が胎土やつくりなどから後期前葉～中葉の土器である可能性が高いというご教示をいただいたことから¹⁾、当該期における本遺跡出土型式を中心に6型式を対象とした。第10表は、その6型式における特徴的な要素を部位ごとに抽出し、39と比較したもの、第20図は、類似した要素を持つと判断した県内資料を集成した中から、より近いものを具体的に掲げた図である。各型式の要素の抽出に際しては、主に『新潟県の考古学』[新潟県考古学会1991]の記述に準拠した。まず、第10表をもとに器形・施文形態・文様構成の3項目において比較検討を行い、その後、第17図の集成を用いながら論を進める。なお、本項の執筆にあたっては、当初、東北地方、特に山形県や福島県の影響も考慮に入れ、後期前葉に東北南部に分布圏を持つ南鏡式との比較も試みたが、類似項はほとんど見出せず、この型式からの影響は極めて低いと判断して対象から除外した²⁾。

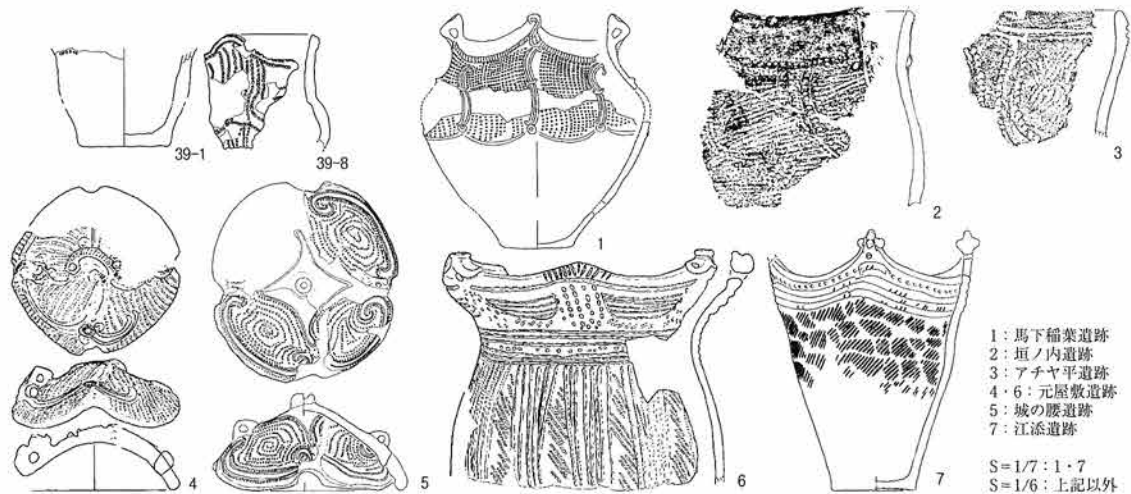
はじめに、器形について検討する。39と同等とはいかないまでも、緩やかな波状を呈する口縁部は南三十稲場式の全段階にわたって類似し、さらに新段階では頸部の括れが比較的強いことも類似している。三十稲場式も波状口縁を呈するといえるが、頸部に付される橋状把手や添付文が口唇部に至って波状をなしているのであり、39の波状口縁とは意味が異なる。加曽利B1式の波状口縁は、39と比較すると少々大きすぎるか。胴部については、39の大きな特徴のひとつでもある「小さいが極端な膨らみ」を呈する器形は、残念ながら該当するものがなかった。あえてあげるならば、三十稲場式にみられる球形の胴部があげられようか。一方、底部から波打つように立ち上がる胴部下形態から考えると、加曽利B1式の深鉢に近い器形ともいえる(第20図7)。

次に、施文形態について検討する。39は全文様を、棒状工具による細かい連続(重複)した円形刺突文で描いている。刺突文を多用するのは三十稲場式で、特に新段階は、古段階のヘラ状工具によるいわゆる爪形状刺突文に代わり、棒状工具による円形刺突文で施文する例が多くみられる。

最後に、文様構成について検討する。39は簾状垂下文をモチーフとする施文がなされるが、これは南三十稲場新段階～最新段階に多用されるものである。特に南三十稲場式新段階は、口縁部の形状に沿った

1) 新発田市教育委員会 田中耕作氏よりご教示を受けた。

2) 南鏡式と併行関係にある網取I式・門前式であるが、南鏡式を含めたこれら三者は「同じ大木10b式から成立していること(中略)文様要素を共有する点」[池谷前掲]より南鏡式と同様の結果が予測されるため、比較検討を行っていない。



第20図 39と県内出土土器

沈線文、波頂部から垂下する簾状垂下文、横位の頸部区画文、胴部の簾状垂下文という文様構成が39と酷似している点が注目される。

以上、39と任意の6型式における比較を試みた。施文形態においては三十稲場式新段階が、器形と文様構成においては南三十稲場新段階が、39と類似する要素を持つ事がわかった。前者の具体例として、第20図1・2・4・5をあげる。1は鉢で、棒状工具による縦位の円形刺突列で胴部を施文した例である。縦方向を意識した施文は、39により近いといえようか。2は、隆起線上に円形刺突文を施した例である。4・5は蓋であり、4は細かい円形刺突文、5は連続（重複）した円形刺突文を施す点が類似するといえる。このように、三十稲場式新段階の蓋には、（細かい）円形刺突文が多用されている。後者の例としては、同図6をあげる。本来ならば沈線で描かれるべき波頂部からの簾状垂下文が、円形刺突文に置き換えられている点が注目される。また突起のない部分の口縁部の形状も、39により近い要素といえる。これら二型式以外で細分型式不明な土器ではあるが、同図3についても触れておきたい。3は「文様モチーフが三十稲場式とは異なる、あるいは判別が困難なもの」〔富樫ほか2002〕とされ、アチャ平2・3期（三十稲場式古、三十稲場式新・南三十稲場式古段階併行）に比定されている土器である。口縁部から円形刺突列が垂下し、頸部と思われる括れ付近で横方向に施文を変えるというような文様構成を、39も呈している。こうした点から、39は三十稲場式新段階・南三十稲場式新段階いずれとも関係が強い土器といえそうである。三十稲場式新段階と南三十稲場式古段階の共伴事例があることは、近年の調査成果において明らかとなりつつある。「型式の境目の土器は、土器を構成する要素の一部欠落や置換が往々にしてみられる」〔田中前掲〕とあるように、三十稲場式新段階と南三十稲場式新段階の要素を併せ持つ漸移的な土器の存在を想定してもよいだろう。そういった土器のひとつとして、39が位置づけられるのではと考える。しかしこの結論は文様構成・施文形態の類似性に拠ったものであり、器形の上から見ると、このような膨らみをもつ胴部上半から加曾利B1式との類似性を窺わせる胴部下半へのつながりが解明できず、この点において、現段階では他型式との類似性は不明とせざるを得ない。今後は県内にとどまらず、より広い地域における資料にも目を向け、より妥当性のある結論が見出せればと思う。